０５・これからもずっと

『０４・レイラ様とあまあま添い寝』の翌日。
朝８時ごろ。

今日は休日。
主人公とレイラは、本来ならゆっくり寝て過ごすはずだった。
しかし主人公は、先ほど急にレイラに起こされた。
何でも、重要な話があるのだという。
という訳で、主人公は急いで支度をして……リビングに向かったところだ。
――一体、どのような用件なのだろう？

ＳＥ１　主人公の足音
【最初から最後まで流す】

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】

「【穏やかに、優しく】
おはよう。
【少し申し訳なさそうに】
悪いな。休日なのに起こしてしまって」

〈主人公〉
「いいえ。気にしないで下さい。それより、お話しって……」

主人公、ドキドキしながらも、早速呼ばれた理由を尋ねる。
正直な所、見当はついている。
わざわざ、こんなにもかしこまるという事は、きっとそういう事なのだろう。
それでも、直接答えを聞くまでは……『本当は違う』『別の話題だ』と思っていたかった。

「【主人公の言葉を受けて、用件を話し始める】
ああ。実は先ほど、騎士団から連絡があった。
それで、少々急ではあるが、君に伝えたい事ができたという訳だ」

〈主人公〉

「もしかして……」

主人公、言いかけたところで続きを言うのが怖くなり、思わずうつむいてしまう。
それでも、意図は伝わったようだ。
レイラは申し訳なさそうに目を細めると、静かにこう言った。

「【できるだけ穏やかに話そうとしている。
しかし、内心かなり驚いている。これは、まだもう少し先の話だと思っていたので】
うん。ご想像の通りだよ。
君達の正式な受け入れ先が決まった」

〈主人公〉
「……」

主人公、『やはりそうか』とわかり、言葉を失う。
これは本来、喜ばしい事のはずだ。
元々レイラとの暮らしは一時的なものであったし、レイラも主人公の世話役から解放されて、さぞホッとする事だろう。

だけど、主人公は喜べない。
いつしか主人公は、レイラの事が大好きになっていた。
そのせいで、いつしか『これからもずっとこの暮らしが続く』いや『続けていきたい』と願うようになっていたからだ。

「しばらく閉鎖していた古い寮がこの度改装を終え、また使えるようになったんだ」

〈主人公〉
「そうだったん、ですね……」

「【ここから※マークまで、
『正式な受け入れ先』について述べる。
決して悪いところではない事、むしろかなり良い環境である事を伝えたい】
古いとは言っても、環境は悪くない。
学校にも訓練所にも通いやすくなるし。
何より、仲間達と一緒に住める」※

〈主人公〉

「……」

レイラが説明してくれるが、主人公はよい相槌が打てない。
ただ茫然と自らのつま先を眺め、この日々が過去のものになる事を受け入れられずにいる。

【少し言いづらそうに】
しかし……」

〈主人公〉
「……？」

だがここで、レイラが言いよどんだ。
詳しくはわからないが、まだ他に伝えたい事があるようだ。

レイラ、主人公を正面から見据えると、緊張した面持ちで続ける。

【少し言いづらそうに。

レイラは『主人公の為を想えば、入寮を勧めた方がいい』と思っている。
だが、レイラ個人としては、それは淋しく、残念なので。
そのため、あくまで一つの選択肢として『入寮しない道もある』という事を伝える】
その。
私どもとしては、無理に転居する必要はないと思っている。
君達が引き取られて一か月。
君に限らず他の者達も、今の住まいに慣れてきた頃だろうしな。
【少し言いづらそうに。
少し照れた様子で】
だからまぁ、その。
【少し言いづらそうに。
『私としては、これからも君にここに住んでいて欲しいと思っている』と言いたいが、
なかなか勇気が出せない】
なんだ。
君さえよければ。の話なんだが……。
【大きく息を吸ってから、ドキドキしつつも、はっきりと伝える。
とうとう勇気を出す】
これからも、この家で暮らしてみないか」

〈主人公〉
「……えっ？」

主人公、予想だにしない言葉に驚き、信じられない気持ちでレイラを見上げる。
そんな主人公に、レイラは一瞬恥ずかしそうに目を泳がせるが……すぐに向き直ると、少し早口でこう付け加えた。

「【少し慌てて、付け加えていく。
強制したくないので。
あくまで、主人公が一番したいと思う事をしてほしいので】
……もちろん、君の意思が優先だ。
私は君に、納得のいく選択をしてほしいと思っている。
まずは寮へ行ってみて、ここと見比べてから決めるといい。
【ここから、※マークまで、
照れつつも真剣に。
まずは『この家に残った場合の良い点』について述べていく】
だが……。もし、ここに残る場合。

『寮暮らしの方が良かった』とは言わせない。
まずは君と話し合って……現状足りていない点とか……不満点を改善すると約束しよう。
とにかく。
今後、もっと良くなる事を保証する」※

そしてレイラが提案した内容は、主人公には十分すぎるものだ。
まさかそんな風に言ってくれるなんて、思ってもみなかった。
この生活を続けたいと思っていたのは、主人公だけではなかったのだ。

「【ここから、※マークまで、
できるだけ落ち着いて、真剣に。
次は『寮に入った場合の良い点』について述べていく】
もちろん、君が『仲間と一緒がいい』と言うのであれば、それがいい。
それから、今回寮母になる者は、相当の料理自慢なんだ。
食事の面では、寮の方が優れていると言わざるを得ない。
【少し言いづらそうに。
もごもごと】
だが……私としては……」

しかしレイラは、どこか自信なさげだ。
立場上、できるだけ公正さを保とうとしているのだろうが、主人公にはそれだけではないように見える。
レイラは『自分が選ばれるわけがない』と思っているのではないだろうか。
思えば、出会った当初から、レイラにはそんな一面があった。
いつも堂々としているようで、本当は周りの意見が気になるし。
人の気持ちに鈍感だと悩みながら……いつでも、主人公の気持ちを最優先に考えてくれていた。
だったら今度は、そんなレイラに、主人公が自分の意思を伝える番だ。
主人公、意を決すると、両のこぶしを握り締めて、まっすぐにレイラを見た。

〈主人公〉
「……あの！」

「【穏やかに返事をする。
しかし、内心は驚いていて、緊張している。
主人公の意思はすでに決まっているようなので。

また、その意思について聞くのが怖いので】
うん？」

〈主人公〉
「……ご説明、ありがとうございます。
でも、わたしの気持ちは、もう決まっています」

一言発するだけで、合間に息を吐くだけで、心臓がどきどきする。
今まで、こんなに緊張した事などない。
今に比べれば、入学した日なんて、完全にリラックスしていたと言ってもいい位だ。

「【少しドキドキした様子で返事をする。
しかし、内心悲観している。
『やっぱり寮の方がいいのだろうか。そりゃあ、そうだよなぁ』と、勝手に悪い方向に考え始めている】
うん」

〈主人公〉

「……わたしは、この家がとても好きです」

だから昨日の夜みたいに、ちょっと回りくどい言い回しになる。

どうやらこれは、主人公の癖のようだ。

大切な事を話す時に限って、余計な情報を増やしてしまう。

「【少し悲しそうに返事をする。

勝手に悪い方向に悲観しているので。

『だけど、仲間と一緒にいたいので、入寮します』という言葉が続くのではないかと思っている】

そうか」

そのせいでレイラは、どうやら誤解をしているらしい。

でも、それは違うと、今から主人公は言おうと思う。

〈主人公〉

「だから。これからもレイラさんさえよろしければ、この家で暮らしたいです。

これからも家事とか、レイラさんのお仕事に関わる事務手続きのお手伝いとか、色々し

て。
必ずレイラさんのお役に立ちます」
瞬間、レイラが息をのみ、大きく目を見開く。
主人公はそれを見ながら、もう一言、一気に言った。
〈主人公〉
「だからどうぞ、これからもよろしくお願いします！」
「【感激して。
しかし、内心、嬉しくて泣きそう。
まさか、こんな答えが聞けるとは思っていなかったので】
……そうか！」
主人公『そうだ』と何度も頷く。
〈主人公〉
「そうです！　これからもこの暮らしを続けられる事が、わたし、本当に嬉しいです！」

それから、こう付け加えると、レイラが大きな声で笑った。

「【嬉しくて思いっきり笑う】
ははは！
【少し得意げに。
さっきまで悲観していた事など、もう忘れ始めている】
そんなに嬉しいか」

〈主人公〉
「はい！」

「【優しく穏やかに。
ここから、※マークまで、
ゆっくりと丁寧に、自分の気持ちをはっきり伝える】
うん。私も同じ気持ちだよ。
そうだ。認めよう。
色々言ったが、本当は単に、私が君と暮らしたいんだ。

私は君にここに居てほしい。
これからも私と、一緒に過ごしてほしい。
つまるところは、それだけなんだ」

〈主人公〉
「わたしも、レイラさんと同じ気持ちです。
レイラさん。
これからも、どうぞよろしくお願いします！」

主人公が右手を差し出すと、レイラがすぐさま、右手で受け止めてくれる。
窓の外には、少しずつ夏の気配が近づいている。
これからの季節は、二人にとって、とても楽しいものになるだろう。
心からそう思えた。

「【優しく穏やかに。
改めて主人公に挨拶する】
ありがとう……改めて、よろしくな。
【とても幸せそうに笑って。明るく言う。

【これからの楽しい未来が頭に浮かぶので】

「ふふ……今日からますます楽しくなりそうだな！」

ここでフェードアウトして終了。